



地域おこし協力隊通信

それぞれの春

vol.24

4月卒業の協力隊員 - 村民の皆様へのメッセージ -

地域おこし協力隊の伊東真由です。

協力隊とは？これは世代によって制度や環境も違えば、立場も認識も全く人それぞれです。共通の答えは多分まだありません。考えても分からなかったのも、ひとまず私は村での暮らしを楽しむことにしました。それは林業、狩猟、祭り、協力隊、日々の暮らし、あらゆる形で叶えられ、この3年間で200名くらいは顔と名前が分かるようになりました。楽しくしているうちに自然と仕事を覚え、文化を知り、人に触れるたび人生の学びを得ることができました。

村の中心は村民のみなさんです。村に足りないものはあまり思いつきません。なにかしてあげようなんて思う隙もなく満ち足りているようでした。私は本当にもらってばかりで、力不足だったかもしれません。ただおこがましくも私の活動や関わりがこれからも元気な村であるための風や肥料のようになれていたらと願います。

3年間皆様本当に良くしていただき、ありがとうございました。引き続き林業をやりながら、様々柔軟に挑戦していきたいと思っています。今や丹波山は第二の故郷です。これからもどうぞよろしくお願いします。

伊東 真由

ファームてんせんえん 大曽根 悠太です。

丹波に来て一年。村の人たちの温かさに触れ、この村が大好きになりました。移住当初は皆さんに心配や迷惑かけっ放しでしたが、それでもこうして生きていられてるのは皆さんのお陰です。金欠のときも色々恵んで頂き有難うございました(涙)

この村で一番大切にしてきたこと、それは「感謝」です。畑を貸してくれた方、農業を応援してくれた方には、野菜や焼き芋での恩返し。お世話になった方への恩を忘れないよう、お名前と日付をノートにメモしていた時期もありました。いつしか「大曽根くん」「悠太くん」と名前でも呼んでもらえるようになって、ボクもその方を下の名前で呼べるようになって、段々と人間関係が育まれていくのを実感しました。

今後は地元の埼玉県小川町で、知人の果樹栽培の手伝いをします。村内でも引き続き畑を借りて、芋や穀類を中心に栽培していく予定です。もちろん本業のアートの活動にもより力を入れていきますよ！埼玉とたばの2拠点生活となりますが、これからも“いち・村人”として、宜しくお願いします！

大曽根 悠太

小村さんがお世話になっているかめやバンガローさんで取材しました



守岡 増さん

恵子さん

たばやま
村民タクシー

NPO法人 小さな村総合研究所

Komura Kouji
小村 幸司

2014年に地域おこし協力隊員として丹波山村に移住し、全国の人口の少ない村に連携を呼びかけ「小さな村g7サミット」を開催。2017年に現在のNPO法人小さな村総合研究所を設立。同年に開始した「たばやま村民タクシー」は、今年3月、関東運輸局から公共交通優良団体として表彰が決まった。

「好奇心」と「寛容性」

駆け抜けた11年

地域おこし協力隊員を卒業した人に、今の暮らしと仕事についてインタビューする「協談活志」第四回は、丹波山村の協力隊員レジェンドの一人、小村幸司さんです。

**協力隊員になったことで自身の考え
た方に変化はありましたか？**

小村 丹波山は第二の青春。東京での暮らしに疲れたというのもあったかも。村のおおらかなリズムや自然に触れて、時間を切り詰めるような暮らしだけじゃないと気付けた。自分のキャリアを活かしたケーブルテレビなどの活動もしたけど、やまびこ庵の手伝いとか全く関係ないことにも挑戦できたのが楽しかった。

現役協力隊員だったころ思い出に残る活動は？

小村 カラオケ。私が使っている事務所は昔スナックだったんだけど、オーナーのマサルさんと話して村を盛り上げようとカラオケルームをやったのね。おばあちゃんたちに昼カラやってもらおうと。一日3000円で貸切。盛り上がったんだけど、夜の利用もだんだん増えて、深夜2時までとか。ひっちゃかめっちゃか（笑）。それから掃除。恵子さんにも負担をかけた。でも面白かった。3年続けてくれた二人にはホントに感謝しています。

NPO法人を設立した経緯を教えてください

小村 行政だけでは進みづらいこと、民間だけでも出来ないこと、この二つの間にやるべき課題がたくさん見えた。公共性を保ちながらスピード感をもってやるというのがNPOを設立したねらい。特に村民タクシーは、地域課題を役場任せにせず、村民に自分ごとにして参加してもらい理解してもらうのが大きな目標だった。

**現役協力隊だった頃と今で協力隊
に変化は感じられますか？**

小村 やっぱ若い人が増えたよね。協力隊一期生だった私と山田さんはすでに40代後半。今のように、20代や30代が次々とやってくるなんて考えられなかった。村の人が外から来る人たちに慣れて、寛容な畑（地域）を育むことで、のびやかな種（人材）がやって来て村を強く思う。農業や肥料を使わなくても強い野菜が育つ自然農法のようにね。

取材後記

丹波山村の協力隊黎明期に様々な活動をしながら都市と村を繋げた小村さん。楽しかったことも、大変だったことも、すべて経験として咀嚼し、常に新しい一步を踏み出そうとする姿は協力隊員OBらしいと感じました。